

選考会の直前には、長年A I・HALLの館長を務めた山口英樹が挨拶。「OMS 戯曲賞には、北村想さんの戯曲塾（伊丹想流私塾～現・劇塾）の卒業生が、たびたび賞を取らせていただいております、最後にこちらに来ていただけるのは非常に光栄。我々としても、一つの区切りかなと思っています」と、感謝の言葉を述べていた。

第32回OMS 戯曲賞の、今年の応募総数は37作品。これまでの最多応募数に比べると半分以下という、寂しい状況だ。にも関わらず選考委員からは、最終選考に残った七作品に対して「今年は接戦。どれも読み応えがあって、なかなか難しい」（佐藤）「一個一個がすごく完成されていて、これらを並べて考えることがナンセンスに思ってしまった」（樋口）「どれも美しさの質が違う」（鈴木）など、今年のレベルの高さをうかがわせる言葉が飛び出していた。

一回目の投票は、13時に行われた。大賞にふさわしいと思う作品は○、気になっている作品は△で、好きな数だけ入れることができる。その結果は下の通り。

|    | 佐藤 | 鈴木 | 佃 | 土田 | 樋口 |
|----|----|----|---|----|----|
| 久野 | ○  |    | ○ |    | △  |
| 武田 |    | ○  | ○ | ○  | ○  |
| 竹田 | ○  | ○  | △ | △  | ○  |
| 田辺 |    | △  |   |    | ○  |
| 田宮 |    | ○  |   | ○  | ◎  |
| 中辻 | ○  |    |   |    | ◎  |
| 水上 |    |    | △ |    | △  |

樋口が「今年は全部に票を入れたい」という理由で、ここ数年は投票に使っていなかった「◎＝特に強く大賞に推したい」のカードを切り、全員がどよめく。その結果、○が四つ入った武田と、○が三つ＋△が二つの竹田がほぼ同率トップ。そこに◎一つ＋○二つの田宮が続く形だ。まずは得票数には関係なく、候補者リスト順に選考が開始された。

### 非常にイメージを喚起させる 久野の描く童話のような世界

第28回以来、四年ぶりのノミネートとなった「階」の久野那美の作品『それは、満月の夜のことでした』は、上演時間一時間足らずの一人芝居だ。ほろ酔いで家に帰る男の目の前に、突然大きな満月が出現。男は満月との対話を試みるために、道の先にある食パン工場のことを詳細に語るが、それはかつて男の知り合いの女性が話してくれた「全部嘘の話」だった……という、寓話的な雰囲気作品だ。

選考委員からは「絵本のような世界観が実に素敵だし、真実は嘘を話す人の頭の中にしかないという台詞も好き」（佃）「エピソードの言葉の選び方が、非常にイメージを喚起させられる。最後に月が空に上っていくのも、自分で自分の人生に蓋をしていたものに気づく瞬間という感じがした」（土田）と、独特の世界観に称賛が集まる。また「今年は少し実験的、様式的にいろんな発想があるものを選ぼうと思う」という佐藤は「一人芝居の短編は、いろんなことがあらわになってごまかしようがないから、若い作家が書き始めるのにちょうどいい。久野さんは普通の言葉を使いながらも、ある世界を作ったり外したりする技法がすごくある。『月と対話する』ということに成立させるのも、やっぱり一人芝居ではすごく有利だと思った」という点を評価。また樋口からは「これは創作のお話だと思う。食パン工場の話が嘘だとしても、彼女から聞いたこの物語はこの世に生まれて、もうなかったことにはできない。だとしたら、作家と嘘つきは何が違うんだろう？ と。あと、彼女のことを語る男の言っていることが、なぜ嘘でないと証明できる？ とか。何が創作で、何が嘘かは、今生きているこの瞬間には本当にわからないん

だろうと思った」と、構造の面白さの指摘があった。

ただ鈴木からは「言葉がすごく素直に入ってきて、読み物としてはすごく楽しい。だけど最後のとても長い、二ページもあるト書きは、お客様に伝える気のある言葉なのだろうか？ 作者が書きたかったから、お書きになっただけではないか？ 男がこの物語の入口と出口でどう変わったか、何を感じたのかが、この複雑なト書きに書かれている気がするけど、そこがちょっとわからない」との言葉が。また「男が酔っ払ってない方が良かったのでは」と佃が問うと、佐藤が「酔っ払っていることで、男が語っていることが夢のような出来事になってしまうという障害が起こってる。それによって、俳優が誰を演じているのかということより、この物語を伝えるだけの存在になってしまうのが、ちょっと残念」と、鈴木と同じく、語り部の男の個性や変化が見えにくいという意見が。さらに樋口からは「現実から物語に変わるといふ、最も劇的な一瞬が、このト書きであることが少しもったいない。すごく小さな所にキュッと世界を着地させてしまう感じになってしまった」という補足があった。

### 気持ち悪くて不可解な関係を 成立させられる武田の手腕

20年ぶりに最終候補にノミネートされた『みえない』で、第30回の大賞を受賞した「マシュマロテント」の武田操美。『蛇含草ホテル』は、孤独死した落語好きの女性・静の死の真相を、静の同級生の妻・長子が小説の題材のために調べていくというストーリー。満ち足りた人生を送っていたはずの静が、寄生虫のような女性・美紀の出現によって、落語の『蛇含草』のように溶けた状態で発見されることになるまでを、シュールな笑いも交えながら描いたドラマだ。

この作品に関しては「圧倒的にエンターテインメントとして、きれいにまとまっている。ファンタジーと現実世界の地続き感のバランスが良く、結構複雑な人間関係もわかりやすく入ってくる」（土田）『みえない』もそうだったけど、気持ち悪い人間関係を書くことが上手。特に美紀のようなキャラを成立させるのって、他にできる作家はなかなかいないと思った」（鈴木）「面白い会話に心を持っていかれるけど、すごく切実な老後ホラー。家族制度と婚姻制度の中にいない人たちは、年を取った時に一体何が残るの？ ということや、すごく問われた気がした」（樋口）など、キャラ作りとストーリー展開を高く評価する言葉が。また佃は「ママ友の言いなりになって自分の子どもを餓死させた事件とか、この前犯人が捕まった、同窓会で再会した男の妻を殺した事件とか、どう考えても不可解な事件があるじゃない？ この虚実入り交じった手法なら、そんな事件の解明ができるんじゃないかと思った」と、社会事件の切り口の巧みさに言及した。

弱点としてあげられたのは、まずしばしば挟まれる笑いのシーンが過剰では？ ということ。鈴木が「すみれ畑の住人との会話とか、良い言い方をするとサービスだけど、もしかするとごまかしかもしれないなあと。そこに武田さんの魅力があるとも思うけど、すみれ畑の住人とかを出さずにこれを書いたら、もっと深いところまで行けたかもしれない」と述べると、樋口も「オモシロの部分とダーティな部分が、上手くコントラストを作っている時はドキリとできるけど、そのバランスが崩れてる印象。静が（美紀への文句を）飲み込むという行為と、落語の『蛇含草』がカチッとハマってたら、バランスは崩れなかったんじゃないか」と指摘する。そしてもう一つは、落語『蛇含草』の使われ方の疑問。これについては土田が『蛇含草』とホテルという関係、そこにラストの『（静と）友だちになりたかった』という長子の言葉が、僕の中できれいに着地しなかった」と語り、佐藤からは「原作の落語はナンセンスな笑いだけど、その笑いと『死体が溶けてなくなる』という孤独死問題を重ね合わせたことに、作者の残酷さがある気がする。人の肉体も記憶も消失するという実態的なテーマを扱う時に、この滑稽さをタイトルにまで使うのはどうなのか？ と思った」と、センシティブな題材にはふさわしくないモチーフだったのでは……という意見が出ていた。

### 方言が満載の竹田の会話劇は 実は今の時代を描くのにも有効

「第26回劇作家協会新人戯曲賞」など、すでに数々の受賞実績を持ちながらも、OMS戯曲賞は意外にも初ノミネートの「ばぶれるりぐる」の竹田モモコ。『川にはとうぜんはしがある』は、彼女の故郷・高知県土佐清水市にある古い家が舞台。都会から実家に戻ってきたイラストレーターの姉・早希と、実家に住む妹・陽子とその家族が、これからの人生をめぐって様々な対話を繰り広げていく。土佐清水市周辺でしか使われていない方言「幡多弁」を駆使しているのが、大きな特徴だ。

これに関しては「不親切な所が一切ないし、とてもすがすがしい話。姉妹の生き方の違い、地域と都

会の違い、世代の違いというつなぎきれないものに、どうやって橋をかけるのか？ ということを感じさせるタイトルが、やっぱり秀逸」(樋口)「ドラマとして本当に上手い。一般的によくある姉妹の生き方の違いみたいなことで、これだけのドラマを作れるのは本当に素晴らしい」(土田)「考え方のまったく違う姉妹が、陽子の娘が突然フィリピンに行くということで『もしかしたら私たちは、全然知らない女を作ったのか。最高やん』という。その結論に行き着くのがすごく美しいし、そのことが書きたかったからこの戯曲を書いたんだと思いたい」(鈴木)などの称賛が。特に佐藤は「今の日本に、ありそうでない戯曲」と断言。「特定の地域を題材にする時は、そこにも家族の愛情や家族間の違いがあるということを書く方が重要になるけど、今そういう戯曲は日本にない。でもここに書かれた姉妹の愛情や、家族の感情はすごく的確だし、そこに着目した方が実は時代が書けるんだと、改めて思った」と、実は日本の「今」を切り取った戯曲という言葉があった。

ただその一方で、物語の時間軸や設定の細かい矛盾についての指摘が非常に多い戯曲でもあった。佃が「高知の言葉もいいし、サラリとしたやり取りだけで人物描写をする所も上手い。ただこの姉妹を対比させるにしても、陽子さんの考えが古すぎないかと。僕が『就職せずに芝居をやる』と言った時、昭和二年生まれのお袋が言ったことと、同じようなことを言ってる(笑)。あとは全体的に約一年の話のはずなのに、三ヶ月ぐらいのような感じ。(陽子の娘の)みまが『フィリピンに行く』と言い出して、そこから出発するまでの二ヶ月間という、一番重くて大事な時間がすっ飛ばされたりと、話の内容と時間の流れのズレが気になってしまう」と言うと、土田も「(移住者の)生田目が、悲しい時にボックスステップを踏むという習慣が、他の人たちにも踏襲されていくけど、その展開が納得できるようになっていない。そこにすごく重要なニュアンスがあると思うので、もう少し丁寧に書いてリアリティを持たせた方が良かった」との意見を寄せる。さらに佐藤からは「『陽の光でキラキラと埃が反射している』などの(映像の)シナリオ的なト書きが多いけど、舞台は映像のように観客の視点を簡単には誘導できない。戯曲のト書きは観客の視点に多様性を与えるような、客観的なものであるべき」、鈴木からは「武田さんにも思ったけど、オモシロの部分減らして、もっと息を深く吸って呼吸を止めて、さらに海の底に潜ってみてほしいなあと。この上手さと美しさがあるんだから、もっとそれを信じてほしい」とアドバイスがあった。

## 解釈が広がる田辺作品は 上演する意欲をかき立てる

第14回で佳作を受賞し、その後もほぼ隔年ペースで最終選考にノミネートされるなど、名実ともにOMS戯曲賞の常連といえる「下鴨車窓」の田辺剛。京都の二人芝居ユニット「このしたやみ」に書き下ろした『留守』は、愛媛県松山市の小劇場「シアターねこ」閉館公演で上演された。次の場所への移転を間近に控えた移動式遊園地の、団長が使用するトレーラーハウスが舞台。団長が留守の間にバッタリ出くわした新入り男性と、古株の掃除女が現状を確認し合ううちに、このトレーラーを盗み出して逃亡することを決める……という「すでに終わりが決まった場所」の気配を、濃厚に漂わせた密室会話劇だ。

佃からは「とても素敵なシチュエーション。王道は王道だけど、荒野、移動遊園地、団長のトレーラーハウスというのにワクワクした」、樋口からは「この設定もいいし、登場する二人がアダムとイブというか、神と思いついていたもの……団長がすべての決定権を持つという、ある意味では楽で安心な場所を捨てて、自分で取捨選択をして生きることを選ぶ人たちの物語だと読み取れた。聖書の例え話のように、これをどう読み解いていくのか？ というところに面白みがある」などの言葉が。△を付けた鈴木からは「チェーホフやストリンドベリの本のように、人間の根源的なことに向き合おうとしていると思う。ささやかな脱出の話というカタルシスをお客様に見せて差し上げることができるし、演出家や俳優も創作意欲が湧いてくるはず。要するに、すごく演出がしたくなった」という、前向きな言葉が聞かれた。

一方で「やっぱり田辺さんは、作り物の世界を作ることが好きで、何を作り物にするのか？ という工夫がある。でも今回は場所も物語も既視感が付きまるとして、それを突破する所がない。最後の脱出も含めて、意外なことが一つも起きなかったのが弱かった。作り物をやりたいのであれば、王道のもう一歩先を行かないといけない」(佐藤)「昇進するとカン違いしていた男が、急に女と逃げることになっていっちゃうように見えて。女の『クビになるのよ』という話から、だんだん男の考えが変わっていくというドラマが、この二人の会話からもう少し見えてほしかった」(土田)「二人の正体が、外を通る従業員や団長の電話などの、外部からの情報でどんどん正当化されるのがもったいない。もっと謎を引っ張ってくれたら、最後までドキドキできたと思う」(佃)などの指摘が。また樋口からは「これだけ素材や土台をそろえているのだから、物語を読み解かせるだけでなく、作者としての言葉をどう紡いでいくか？ とい

うことも読んでみたい」と、作者なりの解釈の表明を求める意見もあった。

## 若い世代の閉塞感や悲しみを 代弁したような田宮の戯曲

樋口作品の出演経験もあるという、20代の俳優・田宮ヨシノリ。彼が作・演出を担当するユニット「よるべ」で上演した『くじらのいびき』は、引きこもりになってしまった会社員の女性の部屋に、様々な人たちが出入りする人間ドラマだ。生きる気力を失った女、立ち直らせようとする妹や恋人、そして女の心に一番寄り添う、クーラーの修理に来た男友達……彼らの何気ない会話から、未来の見えない今の若者たちのリアルを浮かび上がらせた作品だ。

◎を付けた樋口は「俳優としてよく知ってるけど『こんな台本書くんだ』ってビックリした」と笑ってから「20代前半の、最も生命力があって命が前に進む時代に、コロナ禍にハマった作家が書いた本という印象。その年代でコロナを経験したのは、私たちの年代では想像できないほど大きい影響だったと思うし、その閉塞感をアウトプットしたのがこの作品なのかと。次の未来のために、今は活動を止めなきゃいけないという状況を女は再現していて、ポタポタと止まらないクーラーの水は、女の代わりに泣いてくれているのかもしれない。悲しみというものは的確にアウトプットしないと、体に吸収されて内側からやられてしまうけど、死んでガスがパンパンに溜まったクジラと、そのイメージが重なった」と、心境を深く読み解く。他の選考委員からも「若いお客さんが『私のどうにもならない、この悲しい気持ちを言ってくれている』ときっと感じられる、とても丁寧な本。作家からの誠実な手紙であり、多くの祈りみたいなものを俳優や読者に届けてくれる。テクニックではなく、自分の心に耳を澄ませて書いた戯曲だと思う」（鈴木）「将来の道筋が見えない時代を、今の若い子たちは生きていると感じるけど、非常にその空気が伝わってくる。僕は引きこもりになりかけたことがあるけど、最後のある線をコトンと超えると、全部がどうでもよくなって、どこから動いたらいいかわからなくなる。その『わからなくなる』加減が、非常に良かった」（土田）などの評価が。

ただその一方で「いろいろわからない所が多くて、一番疑問だったのは（舞台となる）アパートの部屋の造り。部屋から台所に行ってる時のやり取りでは『どんだけ長い廊下なんだ？』って考えた（笑）。あとは舞台からハケた人がいると、途端にその人がいないものとして、その人に関する会話が始まっちゃうというのが、なんだか恋愛バラエティ番組みたいで、どうなんだろう？ 」（佃）「戯曲を作る時には、自分が持ついろんな思いを一回突き放す作業が必要。というのも、戯曲は小説と違って観客が関与するから。でもこれだけ十全に会話が書かれちゃっていると、ここから何を引いていくか？ という作業がすごく大変だと思う。僕は読み終わった後、何があったのかがわからなかったんだけど、もしかしたら30代以下の俳優と作業をしたら、すごく読み解けるのかもしれない」（佐藤）と、評価が二つに分かれた印象。さらに土田からは「（舞台上の）登場人物が多くなるとちょっと乱れてくるというか、制御しきれてない。全員が淀んでいる感じなので、もう少しキャラの書き分けをした方がいいと思う」という助言が入った。

## 「永遠」を芝居にしてみた 中辻の実験作に議論が沸騰

田宮と同じく初ノミネートとなった、女性だけの演劇ユニット「白いたんぼぽ」の作家・中辻英恵。『初心者のための永遠』は、三つの額縁が縦に連なった舞台美術を先にデザインして、そこから物語を作り上げたという。部屋が増え続ける無限女子寮、大漁のイワシの群れに惹かれる少年が通うアクアリウム、いろんな妄想を膨らませる乗客たちが行き交う駅のホーム。この三つの場所で繰り広げられる会話やモノログによって、「永遠」という概念を浮かび上がらせる、不思議な空気感を持つ作品だ。

この戯曲は、佐藤と樋口が特に熱心に評価。佐藤は「三つの空間を想定しながら、その使い方が全部違う。一つは日常的な部屋、一つは神話的な水槽、もう一つは準抽象的な駅のホーム。それを重ね合わせると、どういうものが見えてくるか？ と。今回の中でト書きが一番整理されていて厳密で、誰がやっても上演できる、ある意味ものすごく実験的な戯曲だと思う。あとはこのタイトルのふてぶてしさ。『初心者でなければ見えない永遠があるんだよ、お前たち』という一種の批判であり、この若さで作家自身は初心者ではないと表明している。僕ぐらいの年齢から読むと、すごく批判された感じがする（笑）」と評し、実際の上演を観たという樋口は「これは『自分』という問いを始めた者たちのための物語だと思った。『自分とは何だろう？』という、終わらない永遠の問題を問いはじめた人のために、この作品はあるんだと。あと、地球上の物質って形は変わろうが、全体的に質量は変わらないというから、その永遠

に消えない物質は、地球という舞台上で遊泳しているはず。この三つのオムニバスは、一見関わりがなさそうだけど、つまりは永遠に考え続けられ、永遠に消えないものをわざわざお芝居にしたということ。その取り組みがものすごく面白いし、こういう演劇を観ると嬉しくなる」と、手放しの褒めようだった。

一方、鈴木は、樋口から実際の上演の様子と、演出家がいらない集団創作体制という話を聞いて「これを読んだ時に、未来がない時代の「(劇団) 青い鳥」みたいだと思ったんですけど、今『(青い鳥と同じく) 演出家がいらない』という話を聞いて、やっぱりなあと(笑)。青い鳥と同じように、生きている俳優の魅力が加わると、より楽しめるのかもしれない。でも青い鳥って、戯曲よりも上演の方がすごかった。そういう意味では、舞台の下地という感じがする」と慎重な態度を。土田からは「すごく混乱した。個を問うというよりも、全体で個をあきらめている話としか読めなくて。特にアクアリウムの少年は、最初は個から始まったのに、最後は水槽の中に入って、社会を形作る無個性の塊になってしまうという。絶望的な話だなあと思ったけど、それが面白かったと言えば面白い」と疑問視する声が上がったが、佐藤から「でもそれは、無個性は否定的なことか？ っていう話だよ。みんなは今まで、それを否定的にとらえていたけど、三万匹のイワシの群れが一つの形を作るということは、決して無個性なことではない。僕はむしろ、少年は希望だと思った」と解釈を語り、土田も「闇落ちじゃなかったか」と納得した様子を見せた。

また佃からは「人間って実は何週間かで(細胞が)全部入れ替わって、別の体になるっていうでしょ？ そういうことを考えたし、一人の人間が魚群を演じるのも素晴らしい発想」と好感を持つ一方「この美術を女子寮、水族館、駅に設定した根拠は何だろう？ とずーっと思って、今に至ってる。とりわけ、なんで女子寮を選んだのかというのが、ずっと小骨がノドに刺さっている感じ」と、一旦保留の姿勢となっていた。

## 水上が描いた演劇の世界は 「お芝居アラウンド」の苦しみ

こちらも初ノミネートとなった「オセロット企画」の水上市宏樹。今回唯一の未上演作品『たった1人の。』は、演劇の世界をストレートに描いた作品だ。高校時代に「たった一人の相棒」と決めた制作の女性に支えられながら、俳優活動を続ける中年男。才能を理解されないことや、副業と両立することの苦難と向き合い、ついにいろんな意味で炎上するが、それはすべて高校生の彼が見ていた夢だった……という、コメディタッチの会話劇だ。

これに△を付けた佃と樋口は「難しいことを抜きにして、バカバカしさに笑いながら読んだ。『君はなぜ自分自身の実力になんかにも無頓着で盲目なんだ！』という台詞があるけど、自分も含めてそんな奴いっぱいいるなあ(笑)。でも無頓着で盲目だからこそ、やり続けられることはあるんだと」(佃)「お芝居って、クリエイションするお芝居と『お芝居アラウンド』の両方があると思っていて。つまり劇団の人間関係とか、あと何年続けるかとか、そういうアラウンドが創作活動とは別にある。多分この作者は、お芝居に救われて、お芝居アラウンドにもものすごく苦しめられている。そのあがきに、私はとても好感が持てた」と優れた点を語る。ただそれと同時に「最後のページを読んだ時のがっかり感はなかった。夢で(現実に)戻ってくるのかよ！ なんだよ！ って」(佃)「夢オチはちょっともったいない。現実では女と対面できる肉体を持っているんだから、男が夢を見る前と見た後で、何かしらの変化があってもよかった」(樋口)と、ラストに難ありという意見が。

さらに他の選考委員からは「すごく微笑ましく読んだけど、演劇を題材にしたいんだったら、作家がもうちょっと演劇というものをちゃんととらえないといけない。描かれている演劇が表層的で、これでは演劇を取り巻く状況にしても何にしても、なぜここで演劇を使ったのかがわからない」(佐藤)「芝居を作る前には、どういうルールでこの虚構を作るのか？ ということを設定することが必要だと思っていて。どっちが夢でどっちが現実か、抽象か具象か。せめてどちらかをものすごく精密に書いてくれたら良かったけど、いろんなものの扱いが中途半端になっていて、世界を作りきれずに終わってる。下北半島と大隅半島が似ているという話は、すごく面白かったけど」(土田)「どこの視点から読んでいいのかかわからない話だったけど、皆さんの話を聞いて『そういうことか』と。でもやっぱり、どうしたらいいかわからない本」(鈴木)と、少し厳しめの意見が集まっていた。

以上で全てのノミネート作品の選考が終了したが、ここで佃から中辻作品について「なぜ女子寮を舞台に設定したのか？ この小骨が取れたら大賞に推せると思うから、誰かに抜いて欲しい。だってこれ、別に独房でもよくない？」と問いかけがあった。佐藤は「小骨は小骨のままでいいんじゃない？」と応じつつも「女子寮はこの中ではある程度抽象的で、話題も部屋番号という(外に)見に行けばすぐわか

るもの。そこから次にどう展開するか？ という時に、見るもの（アクアリウム）と見られるもの（駅のホーム）が選ばれて、この設定になったのでは。もし出発点が独房だったら、違う設定になったと絶対に思う。そうやってこの三つ（の空間）を使って、どう違う世界を作るのか？ という発想が演劇的だと思ったし、構造的に全部変えなきゃいけないと考えるセンスが、僕はいいなあと思う」と回答。さらに鈴木が「この構造を違う手つきで、そして登場人物が生き生きと演じられるようなものにするという気持ちから発想したと思う」と推察し、樋口は「たとえば人が密集する電車はイワシの群れにつながるし、それは社会にもつながっていく。この美術に囚われて、それだけで（戯曲を）構築したのかといたら、多分そうじゃない。ここから始まって、自分の発想を自由に広げて作ったんじゃないか」という私見を述べた。

## 中辻は作家の賞なら推せる ただ「戯曲賞」としては……？

休憩をはさみつつも、ここまで三時間の議論が交わされ、次はいよいよ大賞を決める投票。各自が大賞に推したい作品に、一つだけ○を入れたその結果は、下の表の通り。

|    | 佐藤 | 鈴木 | 佃 | 土田 | 樋口 |
|----|----|----|---|----|----|
| 久野 |    |    |   |    |    |
| 武田 |    |    | ○ |    |    |
| 竹田 |    | ○  |   | ○  |    |
| 田辺 |    |    |   |    |    |
| 田宮 |    |    |   |    |    |
| 中辻 | ○  |    |   |    | ○  |
| 水上 |    |    |   |    |    |

一回目の投票では大賞圏内にあった、武田に票を投じたのは佃のみ。鈴木と土田は竹田、佐藤と樋口は中辻に票を入れ、事実上この二人の一騎打ちとなった。

一人だけ武田に票を入れた佃だが「いろんな話を聞いて、中辻さんもありかなという気にはなっている。ただアクアリウムに関しては登場人物の生活がちゃんと見えるけど、駅の話と女子寮の話が、抽象に抽象がぶつかっている感じがして。もうちょっと女子寮ならではのものが欲しいと思いつつも、それが入るとこの世界観でなくなっちゃいそうな気がするし……そこだけが、小骨が抜けそうで抜けない感じ」と、押しの一手を求める。

そこで樋口が、大学時代に女子寮にいた友人の話を持ち出した。「20年前の女子寮は、毎晩誰かの部屋に必ずみんなが集まって、どうでもいい話を寝るまで続けていたと。今はスマホがあるけど、もしこれが20年前（の戯曲）なら、女子たちは本当に行き来してたのでは。それが私は現代にフィットしていると思ったし、具象といえば具象なのかもしれない」と話すと、佃も「そうだね。僕が思い描く女子寮というのは、そんな（20年前の）ことしかなかった」と、気づきを得たような感触に。

しかし鈴木からは「実際の上演をご覧になった方からのプッシュが、逆に私は裏目に出ている」という、意外な発言が出た。「すごく面白い芝居だったことは伝わるけど、そのプラスのイメージがこの戯曲から読み取れるだろうか？ と。私の読み取り能力も関係していると思うけど『こんな所に連れてってもらえたのか！ すごい！』というような驚きが、戯曲からはあまり感じられない。樋口さんの説明の方が面白い（笑）」と疑問が提示されると、佐藤は「中辻さん本人が自覚的かどうかはわからないけど、僕はこの戯曲をものすごく実験的な作品ということで評価している。それで言うと樋口さんが観た上演は、そのバリエーションの一つとして面白かったんだと思う。何より、この戯曲の複雑な構造を、冒頭の1頁だけでバン！ と説明できているのがすごい」と感嘆しつつ「ものすごく力のある作家だから、作家の賞であれば間違いなく推せる。ただ戯曲賞の場合は、作家がどこまで自覚をして書いたものか？ というのがあるから、ある種のカッコ付きのものにはなる」と、改めて一筋縄でいかない戯曲であることを示した。

もう一人、竹田に票を入れた土田は「最初は武田さんを推したけど、どこかモヤッとしたものを感じていた。信さんが孤独死と落語の扱い方の話をした時に、それか！ と。わりとこれは、作家の決定的な

ことという気がする。中辻さんもだんだん面白くは感じてきているけど、冷静に戯曲だけを読んだ評価で考えると、やはりここまで普遍的な作品を書けることはなかなかできないと思って、竹田さんにした」と理由を述べた。

## 時間の切り方と国のチョイス 竹田作品に次々と疑問点が

ここで議論は、竹田の方に移動。まず佐藤は「竹田さんが大賞でも反対はしない」と、同等のレベルにあることを認める。「日本の一地方を書いたというのは、ものすごく自覚的。都会の側からの作り物ではないし、東京にいとわからない言葉や情報がたくさんあって、それがすごくリアルだと思う。そして家庭と愛情の問題として、他人だったら断絶になることでも、家族だから橋がかかっているけどかかってないような状態になるという。それが大事だという戯曲としてすごく評価するし、昭和二年のままな妹の考え方も、逆にすごく地方の今をえぐり取っているように見える」と、優れた点を指摘した。

一方、佃からは「やっぱり一年という時間軸の、どこを切って見せるのか？ という切り口がきれいな過ぎる気がする。『え、こここここの間の時間が、一番ドロドロしてるんじゃないの？』という所が、すっ飛ばされてあの結末になっているのがなあ」と反対意見が。それに対して樋口が「そのドロドロは別に、お客さんが見たい所ではない気がしたんじゃないか。それをどう書くかも肝だけど、『観客はその部分は望んでいない』というのを見越すほど、ものすごく考えて書いたと思う」と、中辻推しにも関わらず擁護するが、佃は「そこは直接観せなくても、全然いいと思う。でもそこ（ドロドロ）を経た後のここ（ラスト）なのか？ と。この感じだったら二ヶ月後じゃなくて、翌日でもありな気がする」と言うと、他の選考委員からは「確かに」というような声上がる。

続けて鈴木が「みまがフィリピンでオペレーターになるって、ものすごく次元が違う。大学は理系にするか文系にするかという話をした所に『役者になる』と言われたような……いや、役者ならまだ対応の仕様があるけど、もうポカンとするというか。その鳩に豆鉄砲なビックリが『知らん女』だという。みまは奴らを黙らせた、黙らせてやった。だから知らん女だし、それができる女を作った陽子は偉いという話になっていくんじゃないか」と改めて魅力を語る。

ただここで鈴木が出した「フィリピン」というワードが、少し場の空気を変えた。佐藤が「英語ができないのに、フィリピンのコールセンターに行くって本当にやばい。多分ものすごくひどい目に遭うけど、そこは自覚的なのかな」と疑問を呈すると「そうそう、この子死ぬかもしれないって思った。誰が聞いても『止めておいた方がいい』って場所を選んだ気がするし、だったらもっと格闘があるはず」（佃）など、主に男性陣から場所のチョイスのまずさを指摘する声がある。その一方で女性陣からは「フィリピンのイメージが私は違う。英語の学校がいっぱいあるよね、という」（鈴木）「私もそこまでやばい場所とは思わない。だったらわざわざ（リゾート地の）セブ島を出すかな？」（樋口）とネガティブな意見が出なかったのが、面白い現象だった。

## わからないものを選ぶのか 普遍的な楽しさを選ぶのか

ただ、ここまでしばしば出てきた「作家が自分の書いたことに、自覚的かどうか」という問いに対して、樋口は「作家が自覚的かどうかなんて誰にもわからないだろうし、自覚的でなければどうなのか？ とも思う。ただ中辻さんの作品は、竹田さんと違ってわからないことが多い分、半分ぐらいの人は受け入れられないかもしれないなど。簡単にわからないものだからこそ、私はこういう作品の背中を押したい」と、中辻の方を選択した理由を明かす。

それを受けて竹田を推す二人のうち、鈴木は「OMS戯曲賞は、誰もがわからないかもしれないものに対して『わかってよ』という姿勢がすごくあるし、中辻さんのような作品を選ぶのは、ある意味伝統に則っている。そういう意味では中辻さんに賛成と言えるけど、これまで入賞してきた実験的な作品ほどの『びっくりしたなあ、もう！』がない。竹田さんの方は、登場人物が魅力的に見えて、俳優が魅力的に見えて、観客を楽しませる心意気がある。だから中辻さんと竹田さんとは、本当に美のジャンルが違うから……困ったね（笑）」と、この二作を比べることの難しさを解説。一方、土田は「僕は『中辻さんでもいい』という感じには、ちょっとなってない。理解しようとしてるけど、自分の中で納得できていない」と疑問を呈する。

このように、佐藤と樋口は中辻推しだけど、竹田でも構わない。鈴木と土田は竹田推しで、中辻には大きなためらいがある。佃はやや中辻に傾き、竹田は認めないという構図で、議論がストップ状態にな

ってしまった。そこで選考会の司会の一人で、OMS 戯曲賞世話人の小堀純が「もうゴジラが強いのか、キングギドラが強いのかって話」と冗談めかして発言し、少し場の空気を変えた。しかし「もう一度投票しますか？」という提案には「僕が中辻さんに移すだけ」（佃）「中辻さん大賞は、今のままではスッキリしない」（土田）ということで、議論は再開された。

佃は改めて、竹田作品の時間軸の切り取り方の問題を出しながらも「戯曲としてよく書けているからこそ、傷が見えてしまう」と発言。それを受けて土田も「それはそう。僕も『ここはもっとこうしたら……』』と思う所がいろいろあるけど、それは矛盾がはっきりしてしまう本だから」と応え、鈴木も「好きなのは竹田さんだけど、まずい点の中辻さんよりも見えてしまう。良くないことかもしれないけど、ウェルメイド系は突っ込む所が出てしまいがち」と、竹田作品が「よくできている」ゆえにこういう議論で不利になることを指摘。一方で中辻作品については、樋口が「中辻さんの場合『じゃあどこを書き換えれば、この戯曲はもっと良くなるんですか？』』って思う。竹田さんの改善の方法は指摘できても、中辻さんのこのエネルギーや考え方の改善点はわからない」と圧倒されたように語ると、鈴木からは「中辻さんのご自身の世界観があり、それはこの方の頭の中の世界……ある意味夢の世界なわけで『ここがおかしい』』とは言いにくい。だって人に『そんな夢を見るのはおかしいよ』なんて、指摘する方がおかしいでしょ？（一同笑）だから非常に、この二つを比べるのは難しい」と、再び膠着状態となった。

ここで小堀が、過去のOMS 戯曲賞では、大賞と同等の作品に特別賞を出すとか、様々な例外が生まれた年があったことを説明。ただこれに対しては、第1回から選考委員を務める佐藤から「いろんな基準を作っちゃうと、また来年以降いろんな解決方法を考えざるを得なくなる。だからもうちょっと議論して、投票して大賞の一人を決めて、その次は佳作をどうするかと、手順通りにやった方がいいと思う」と、過去の教訓を生かして、正攻法で行くことを提案した。

## 新しい気づきが扉を開いた 大賞&佳作が次々に決定

再び議論が始まると、佃が「中辻さんの女子寮について、僕は読み違えていたかもしれない」と、山が動くような意見を出してきた。「誰かが何かを言おうとすると『知ってる』』とか『おやすみ』』って話を切られちゃうんだけど、それは抽象でもなんでもなくて、彼女たちの生活の仕方なんじゃないかって。生活の話をされた時に、いちいちそれを切っていくのが彼女たちのリアルなんだと。自分が演出する時に、手がかりがあんまり見えないと思って読んでいたけど、今はそうでもないぞと思っている。ちょっと小骨が取れた感じ」と、霧が晴れたような口調で話す。

すると鈴木も「このある意味数学的な、統制の取れた構造って、俳優それぞれの魅力や、揺らぎで見せる系なのかな？』』と思う。技術のすごさじゃなくて、その俳優自身の初々しさとか可愛らしさを丁寧に扱う方が、いい上演になるんじゃないかと思う」と演出プランを語ると、佃からは「これ、今僕と一緒にやってるシニア劇団のおばちゃんがやっても面白いと思う（全員から賛同の声）。なんだかどどん血が通い出した、この本に（笑）」と、完全に覚醒したような状態になった。

全員が演出家モードに入ることで「ゴジラとキングギドラのどちらが強いのか」ではなく「どちらにどのような演出戦略の違いがあり、どちらを好ましいと思うか』』がという、新たな判断の扉が開く。そこで小堀が再投票を呼びかけ、再び大賞に推す作品一つだけに○を付けることに。その結果は下の通り。

|    | 佐藤 | 鈴木 | 佃 | 土田 | 樋口 |
|----|----|----|---|----|----|
| 久野 |    |    |   |    |    |
| 武田 |    |    |   |    |    |
| 竹田 |    | ○  |   | ○  |    |
| 田辺 |    |    |   |    |    |
| 田宮 |    |    |   |    |    |
| 中辻 | ○  |    | ○ |    | ○  |
| 水上 |    |    |   |    |    |

中辻三票・竹田二票で、17時直前に中辻英恵『初心者のための永遠』が、第32回OMS 戯曲賞大賞に決定した。初ノミネートでの大賞獲得は、第29回の山本彩（現：やまもとあや）『花を摘む人』以来

となる。

この結果を受けて、鈴木が「話し合うのって大事だなあと。人から『こういう見方がある』というお話を聞くのは、本当に大事」としみじみと話すと、佃が「それはそう。だって僕、最初中辻さんはノーマークだったんだから」と言って笑いが起こる。単なる多数決や投票だけでは生まれない、話し合いならではの票の動き方の面白さを、特に味わう回となった。

続けて佳作の投票が行われ、佳作に推したい候補一人に○を付けることに。その結果は下の通り。

|    | 佐藤 | 鈴木 | 佃 | 土田 | 樋口 |
|----|----|----|---|----|----|
| 久野 |    |    |   |    |    |
| 武田 |    |    |   |    |    |
| 竹田 | ○  | ○  |   | ○  |    |
| 田辺 |    |    |   |    |    |
| 田宮 |    |    | ○ |    | ○  |
| 中辻 |    |    |   |    |    |
| 水上 |    |    |   |    |    |

佐藤、鈴木、土田が竹田。佃と樋口が田宮に投票。樋口は田宮にした理由を「竹田さんは、中辻さんがいなかったら大賞だった。大賞を取れる人なのに……という思いが、どうしてもある」というと、全員から同意するような声がある。しかしそこで小堀から「やっぱり作家は、佳作でも嬉しいと思う。竹田さんが大賞にふさわしいというのはわかるけど、どんなに実績があって実力があっても、作家はいつ書けなくなるかわからない。取れるときに授賞した方がいい」と、長年の経験から助言。鈴木や土田からも「最初は佳作は田宮さんで考えていたけど、そのことを考えて竹田さんにした」という意見があり、大賞決定から30分も経たないうちに、竹田モモコ『川にはとうぜんはしがある』が佳作に決定。竹田もまた、初ノミネートでの佳作受賞となった。

### 「劇場に支えられた」という 大賞・中辻の象徴的な言葉

授賞式&公開選評会は、A I・H A L Lのホールで行われた。これまで数多の演劇が上演されてきたこの空間が、数ヶ月後には閉じられるということに、改めて思いを馳せる。佳作を受賞した竹田モモコの芝居を、ここA I・H A L Lで初めて観たという人も多かっただろう。

18時半に授賞式が始まり、大賞の中辻は授賞の挨拶で「今回受賞した作品は、2023年度の『W I N G C U P』に出場した作品で、竹腰かなこさんに美術プランを作ってください、それに合わせて台本を書くという試みをしました。『できるかなあ?』と思って書きましたが、思い切って挑戦して良かったです」と上演当時を振り返り、さらに「この作品を上演したウイングフィールドは、高校生の時に初めて書いた台本を上演した劇場。そして2021年度の『伊丹想流劇塾』に参加していたので、A I・H A L Lにも思い出があります。いろんな劇場と、いろんな方々に支えられたと思います。これからも、もりもり書いていきたいという気持ちです」と抱負を語った。

佳作を受賞した竹田モモコは「この歴史ある賞の佳作をいただき、本当に嬉しい限りです。『川には…』はさまざまな立場にある女性が、次のステップに行く姿を書きたいと思って書いた作品。たくさんの人に支えられて上演できて、このような賞をいただけて、本当にありがたいことです」と感慨深げに語り、さらに「私は一人ユニットでやっていますが、うちの制作や、演出のチャーハン（・ラモーン）さんなど、いろんな人に支えられてここまでやってることができて、この賞をいただくことができました。これからも精進して参ります」と明るく感謝を述べた。

授賞式に引き続き、公開選評会が行われた。中辻と竹田には全選考委員から、久野は佐藤、武田は佃、田辺は鈴木、田宮は土田、水上は樋口から、選考会中に出てきた肯定的な意見や、アドバイスの言葉が送られる。受賞を逃しながらも、選評を参考に戯曲の書き方を見直し、数年後に見事に大賞や佳作を獲得した作家は数多い。自分の選評以外にも、他の作家の選評を取り入れていく人もいるだろう。彼らが来年以降、どんな再チャレンジを見せてくれるかに期待したい。

## 定められない戯曲の挑戦と 方言戯曲の次なる可能性へ

大賞を受賞した中辻は、初の公開選評会に「この賞に応募したことで、こういう選評をいただける機会があったのが、まず嬉しいなあと思います。いろんなご意見をいただきましたが、土田さんの『個性を否定して、なくしていく』というような言葉が『あ、確かにそういう風にも取れるなあ』と、すごく印象に残りました」と、少し興奮気味に話す。また「実験的な作品」と評されたことに「今までワンシチュエーションでずっと会話している台本を書いていたので、ああいう風に場面がどんどん切り替わって、その切れ目もシームレスにする作品は、本当に初めてやりました」と、かなりの挑戦だったことを認めた。ちなみに選考会で話題になった「なぜこの三つの場所を選んだのか」という疑問については「舞台の模型を見て『何に見えるのか?』ということを手順に連想し、なおかつ出演者の三人がいられるような場所を考えて、稽古が始まる前に書き上げました」と、ごくシンプルな発想だったことを明かした。

この作品について「上演した時は、無限とか永遠というイメージ、それぞれが絶対的な孤独であるという感想を言ってくださる方が多くて、きちんと届いて良かったと思っています」と満足感を見せつつ、今後は「私は演出をせず、ずっと台本だけを書いてますけど、演じる人の性別とか年齢の組み合わせが、一つに定まらないものを書きたい。テキストはテキストとしてあるけれど、いろんな演出の方や俳優の方の、いろんな見せ場の可能性があるようなものを書いていきたいと思います」と、次を見据えるような言葉を寄せてくれた。

一方、竹田は「今回がOMS戯曲賞の、三回目の挑戦でした。箸にも棒にもかからなくて、もうダメかなあと思っていた所だったので嬉しいです」と、まずは喜びの一言。選考委員の言葉に対しては「何かに挑戦するというより、無理しないことを自覚して書きましたけど、自分の引き出しと、自分の技術を全部投入しました。それでも足りない部分、もうちょっと書き込めた部分があったのは、本当に選考委員の皆様のおっしゃる通り(笑)。でも子育てを終えた同世代の人たちに『よく頑張ったね、お疲れ!』って、次のステージへの区切りを付けるような作品を書くことはできたので、満足しています」と謙虚に語った。

また方言を生かした台詞が評価されたことについて「みんな自分の土地の言葉を使って書けばいいのにとするのは、常に思っています。いろんな土地の言葉を聞くのは楽しいし、特に観光都市じゃない都市の方言なんて、よほどマニアじゃなきゃ聞く機会がないですから」と方言芝居の可能性について語る。さらに今後の作品について「お客さんの前に鏡を置くような感じで、その人の立ち位置を舞台の人が体現して、『今』を見せるようなことをやっていきたいなあ。これまでは家族とか、他人にあまり見せないコミュニティーを書くことが多かったけど、企業や公共の場とかで起こる人間の気持ちの機微、求められる役割とパーソナルとのズレを書きたいです」と意欲を見せたが「それを幡多弁で書けたらいいんですけど、(幡多エリアは)企業がないので(笑)。どうしたもんかな?と思っています」と、次が楽しみなコメントをしてくれた。ちなみに選考会で論議を醸した「フィリピンで働く」というチョイスは「今は待遇や給与がいいと話を聞いたので」と、特に意味深なものではなかったということを追記しておく。

今回応募総数が40作品を切ったことで、関係者の間には少なからず衝撃が走っていた。しかしそこに残った作品は、選考委員たちが本当に「今回は難しい」と何度も口にするほど、非常にレベルの高い……しかも似たようなスタイルではなく、独自の色を持つ作品ぞろいだった。改めて関西演劇の多様性と密度の濃さを再確認したと同時に、もしかしたらいろんな事情で応募されなかった作品の中にも、彼らと肩を並べる傑作がまだまだあったのでは、とも考えずにはいられない。

昨年から、主催の大阪ガスネットワーク株式会社だけでなく、様々な企業の協賛・協力がバックに付いたOMS戯曲賞。関西の演劇関係者全体が支える体制となっただけに、少しでも長く継続してもらいたい。そのためには、もっと多くの作家たちの応募がどうしても必要だ。一人でも多くの新しい作家、あるいは以前挑戦したことがある作家たちが応募してきて、再び選考委員たちの頭を抱えさせ、お互いが刺激し合う時間が生まれることを願っている。

(文中敬称略)